

学生社会ボランティアコーナーの開設と シティズンシッププログラムの効果について

The Opening of a Volunteer Corner and the Outcomes of Citizenship
Learning Programs at Tama University

共同研究メンバー

○梅澤佳子*、石川晴子*、中澤弥*、西村知晃**、日比野勲***、矢内直美*（○代表、執筆者）

キーワード：ボランティア、活動支援、シティズンシップ

Keywords：Volunteer, Support for Activities, Citizenship

1. 研究の経緯

経営情報学部産官学民連携委員会は、2021年度「学生社会ボランティアコーナー」（以下コーナーと省略する）の開設に向けて2020年度より準備を進めてきた。コーナーの担当者は、産官学民連携委員会の教員2名、職員1名、そして日比野勲氏（東洋大学ボランティア支援室ボランティアコーディネーター）に非常勤職員として本学ボランティアコーディネーターを兼務いただき4名体制で運営することになった。

折しも当時、コーナーの担当者である梅澤が学生委員会を兼務し、同じく西村が就職委員会を兼務していたことに加え、産官学民連携委員の中澤が学生委員長を兼務していた。各委員会とボランティアの活動は教育上関連することから、国際交流委員長である石川にも参加を呼びかけ、日比野氏、矢内職員の6名により委員会を横断して研究を進めることになった。

2. 研究の目的

本研究は本学経営情報学部の学生を対象とし、ボランティア活動の情報と機会を提供することで、学生たちがどのような気づきと学びを得ていくのかその過程を観察し、今後のコーナー運営、各委員会の横断的な仕組みづくりに活かしていくことを目的としている。

シティズンシップ学習は、社会に積極的に参加し、責任と良識ある市民を育てる学びである。プログラムを通じて学生たちが国内・国外の出来事に広く関心を持ち、多様な考えを受容できる豊かな市民性を育み、社会問題についての認識を深め、主体的に活動に参加する、参画する力をつけていくことに期待するものである。コーナーの開設、シティズンシップ学習プログラ

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

** 九州国際大学現代ビジネス学部

***東洋大学ボランティアコーディネーター、多摩大学経営情報学部ボランティアコーディネーター

ムの提供により、「学習者が国際的な諸問題に向き合い、その解決に向けて地域レベル及び国際レベルで積極的な役割を担うようにすることで、平和的で、寛容な、包括的、安全で持続可能な世界の構築に率先して貢献できるようになること（Global Citizenship Education（=GCED：地球市民教育）」¹を目指したいと考えた。

3. 実施内容

実施した事業は、①ボランティア情報の提供、②相談窓口、③ボランティアカフェの開催、④大学主催によるプログラムの提供である。

表1 2021年度ボランティア事業リスト 【ボランティアカフェ】			参加
開催日	テーマ	ゲスト・講師	
5/19	はじめまして、ボランティアコーナーです！	日比野 勲氏(東洋大学・多摩大学ボランティアコーディネーター)	4
5/26	わくわくする地域との関わり方	高城芳之氏(NPO法人アクションポート横浜代表理事) 橋本 空氏(町田市地域活動サポートオフィス職員、へりぼーと代表)	6
7/07	学生がつくる”まち”八王子	大学コンソーシアム八王子 学生委員会の皆さん(大学連合)	5
【イベント】			
6/29	夏ボラ相談会 in 多摩大学	多摩市ボランティア・市民活動支援センター職員	6
11/16・23	SDGs×スポーツの可能性について考える	岸 卓巨氏(一般社団法人A-GOAL代表)、濱野大志氏(同志社大学学生)	11
12/12	ビーチクリーンアップ in 由比ガ浜	相良菜央氏(国際イルカ・クジラ教育リサーチセンタージャパン代表)	3
12~1月	多摩大学・附属聖ヶ丘高等学校高大連携プロジェクト 連光寺・聖ヶ丘地区クリーンアップ		8

① ボランティア情報の提供

学外から要請のあったボランティア活動は、いつでも情報を確認できるよう T-NEXT から情報発信を行った。また、コーナーでも最新版の閲覧リストを用意した。

② 相談窓口

「学生社会ボランティアコーナー」相談窓口は、学期中の週3日、コーナー担当教職員が在籍し、ボランティア情報の提供、学生からの相談に対応した。また、ボランティアを希望する学生からの問い合わせについては、産官学民連携センター事務局において職員も対応した。

③ ボランティアカフェの開催

2020年4月から学生たちは新型コロナウイルス感染症の拡大により1年間学外活動の自粛を強いられることになった。2021年春、新型コロナウイルス感染症が若干落ち着いてきたことを見据え、仲間づくり、交流の場、ボランティア活動への理解を深めることを目的に「ボランティア・カフェ」を開催した。

初回は日比野勲ボランティアコーディネーターによる「プチボランティア講座」、第2回はゲストスピーカーをお招きし、NPO法人アクションポート横浜代表理事の高城芳之氏にNPOの活動紹介と、学生時代の取り組みと現在の活動内容について町田市地域活動サポートオフィス職員であり、へりぼーと²代表の橋本空氏の活動を紹介していただいた。第3回は、本学の学生も参加している八王子学生委員会（事務局：大学コンソーシアム八王子）の活動紹介を他大学の学生委員にも参加いただき実施した。

¹ 文部科学省 HP「参考5 GCED :Global Citizenship Education(地球市民教育)について 2. GCEDの目標」より引用。

² 「へりぼーと」は、町田氏相原地区で「地域に多世代が集う居場所を作りたい」という考えのもと、月に1回カフェ活動をしている法政大学の学生団体。

④ 大学主催プログラムの提供

「夏ボラ相談会 in 多摩大学」は、夏季長期休暇期間に活動できるボランティアプログラムのリストを用意し、多摩市ボランティア・市民活動支援センター職員を招いてボランティア相談会を開催した。

「SDGs × スポーツの可能性について考える」プログラムは、



アフリカ（9カ国：2022年9月現在）で地域スポーツクラブを通じて食料支援・感染症予防支援など迅速な支援を実施している一般社団法人 A-GOAL 代表岸卓巨氏による活動紹介とグループワークであった。岸代表からは A-GOAL 設立の経緯、活動内容、現地の様子などについて説明がなされた。また実際に現地で地域スポーツクラブを設立し、現地スタッフにクラブを預け、現在も日本からサポートを行っている濱野氏から体験談をオンラインで聞く機会を設けた。地域スポーツクラブを通じての支援という点、当初、学生はスポーツイベントの開催やスポーツ指導、スポーツ教育を想像したようであるが、スポーツをハブに子どもの居場所、ドラッグや犯罪の防止、教育機会の提供、食料、農業、感染予防・啓発活動等々、多岐わたって支援が可能であることなど多くの気づきを得たようであった。またアフリカにおいては地域スポーツクラブが現地住民から信頼が厚く、地域の情報や課題をよく理解していることなどを意外に感じたようである。

「ビーチクリーンアップ in 由比ガ浜」は、イルカ・クジラと自然の素晴らしさ・大切さを伝える環境団体 ICERC Japan（国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター）代表相良菜央氏によるプログラムを実施した。



事前学習として海洋環境汚染の現状や団体の取り組み、活動について説明を受けた後に、フィールドワークとして由比ガ浜のゴミ拾いを行い、後日、学内において事後の振り返りを行った。遠目には美しく見える浜辺であるが、実際に砂浜を見るとマイクロプラスチックにつながる無数のプラスチックごみが砂の一部と化すほどに広がっており、学生たちは環境汚染の実態に衝撃を受けた。

「連光寺・聖ヶ丘地区クリーンアップ」は高大連携事業として学生と附属聖ヶ丘高校生徒が企画段階から協働して実施したプロジェクトである。本学多摩キャンパスが立地する多摩ニュータウンと海洋汚染に



つながるマイクロプラスチックの問題がどのようにつながっているのかを考えるプログラムであった。参加学生の中には所属するゼミの地域活動の一貫として奥多摩でゴミ拾いを行っている学生もあり、議論では山から都市そして海へと連続する環境汚染の課題について話が広がる場面もあった。

4. まとめと今後の展望

2021年5月の連休明けから初年次教育プレゼミナール、2・3・4年必修のホームゼミナールの時間を通じて「学生社会ボランティアコーナー」開設の案内を行ったところ、ボランティア活動と奉仕活動を同じ活動と理解している学生が非常に多いことがわかった。そのため正しい知識を学ぶ機会の提供は必要であると感じた。6月初旬からボランティアカフェなどのイベントを開始し、6月中旬には、夏季長期休暇期間のボランティア紹介イベントを実施した。ボラ

ンティア活動は自発的に行うことに意義があるが、学生がひとりでボランティア活動に参加することは勇気がいるため、相談できる場所、仲間づくりの場の存在は重要である。ボランティア活動を主導してくれる緩やかな学生チームもでき、第2回ボランティアカフェをきっかけにNPO 法人アクションポート横浜の活動に参加している学生もいる。ボランティア活動は一度経験すると視野が広がり、地域や社会に目を向けて物事を考えられるようになる。また、ボランティアを通じた人間関係から自分を知ることや振り返ることが出来る。そのような学生の成長と変化を今後も支えていきたい。

当初は参与観察、ヒアリング調査、アンケート調査を予定していた。しかしながら2021年初夏から新型コロナウイルス感染症の急速な感染拡大により、学生たちが申込みを済ませていた外部のボランティア活動は夏季休暇中の活動を含めほとんどが中止となってしまった。活動をオンラインプログラムに変更して実施する団体もあったが、学生の関心は低く参加には至らなかった。そのような状況からサンプル数が集められず、計画していた調査が実施できなかったことが心残りである。

参考文献

- [1] 文部科学省 HP「参考 5GCED :Global Citizenship Education(地球市民教育)について 2. GCED の目標」
- [2] 赤澤清孝「大学ボランティアセンター職員セミナー 2021 基礎セミナー」(2021 年 9 月 9 日オンライン開催資料)
- [3] 逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著・立教大学 RSL センター編集『リベラルアーツとしてのサービスラーニング - シティズンシップを耕す教育』北樹出版 (2017 年)
- [4] 田中優子、法政大学社会学部「社会を変えるための実践論」講座編『そろそろ「社会運動」の話しよう』明石出版 (2019 年)